

F1 経産牛を活用した ET による双子生産の取り組みについて（事例紹介）

今回の ET センターニュースは F1 経産牛を受卵牛として活用し、2 卵移植を行っている 2 つの牧場の取り組み事例を紹介します。F1 経産牛の活用法のひとつとしてご参考にしていただければ幸いです。

<A 農場、黄体側に 2 卵を移植>

2009 年度は全農凍結卵 2 卵もしくは新鮮卵 2 卵移植を 57 頭に行い、37 頭が受胎し、受胎率は 64.9%であった。エコーによる 55 日鑑定時の双子妊娠率は 51.4%（19 頭/37 頭）であった。移植器はカスー式またはモー4 号を使用している。

双子と判定した牛は増し飼いをを行い、分娩 2 ヶ月前よりチモシーを 1k g 増やし、1 ヶ月前よりさらにルーサン 0.3k g を追加して与えている。

現在までに、双子と判定された 17 頭が分娩し、エコー判定どおり全て双子であった。生時体重は目標の平均 25kg を超えて分娩をしている（♀平均：25.9kg、♂平均：27.8kg、全体平均：27.1kg）。現在までに逆子によると思われる死産は 2 例確認している。

<B 農場、両角に 1 卵ずつ合計 2 卵を移植>

2009 年度の全農凍結卵 2 卵移植は 62 頭に行い、42 頭が受胎し、受胎率は 67.7%であった。妊娠鑑定は 60-70 日で行っている。移植器はモー1 号を使用している。

妊娠牛、非妊娠牛を同じところで飼養しており、増し飼いなどは行っていないため、産子は小さい傾向にあるという。また双子分娩時の難産は、この 1 年間ほとんどないという。B 農場については、双子分娩率、生時体重、分娩時の事故など、今後正確なデータを追加して報告する予定である。

	飼養頭数 (経産牛)	受胎率	H21 双子率 ^{*1}
A 農場	約 260 頭	64.9% (37 頭/57 頭)	51.4% (19 頭/37 頭)
B 農場	約 100 頭	67.7% (42 頭/62 頭)	現在受胎中

*1・・・A 農場は 60 日妊娠鑑定時に双子と判断したもの